

小学校高学年児童における英語アルファベット習得過程の分析 －第5学年と第6学年での英語書取テストの比較から－

Analysis of the English Alphabet Acquisition Process of Upper Elementary School Children －Through Comparison of Writing Tests in the 5th and 6th Grades－

油布 茂子 前田 康二¹
YUFU Shigeko MAEDA Koji

キーワード：小学校外国語，書くこと，アルファベット習得，誤答分析

Key Words：Elementary School English Education， Writing， Acquisition of Alphabet，
Error Analysis

1. はじめに

2020年度から，中学年において「外国語活動」，高学年では「外国語科」が実施されることとなった。『小学校学習指導要領（平成29年度告示）解説外国語活動・外国語編』によれば，「平成23年度から高学年において外国語活動が導入され，その充実により，児童の高い学習意欲，中学生の外国語教育に対する積極性の向上といった成果が認められている。一方で，①音声中心で学んだことが，中学校の段階で音声から文字への学習に円滑に接続されていない¹⁾とあり，中学校に向けての円滑な学び，「書く力」をどう小学校で養成していくのかが大きな課題となっている。「書くこと」は，児童にとって容易いタスクではなく，アレン玉井も「母語である日本語のリタラシーを獲得するのも難しいのですが，外国語という英語になるとそれはさらに難しくなります。」²⁾と述べている。

英語を書くためには，アルファベットを正しく書く力を習得しなければならない。児童にとって，アルファベットを習得するとはどのようなことなのであろうか。小学校第5・6学年児童であろうとも，英語の初学者である彼らにとって，大小52文字のアルファベットを間違いなくすべて書けることは難しく，その習得に困難が伴うことは想像に難くない。小学校段階でアルファベットを正しく習得していることは，彼らの将来にわたる英語学習の大きな基礎になる。小学校高学年になった児童が，外国語科の授業を通じて，どのような過程を経てアルファベットを習得していくのか。本稿では，第一著者の小学校での指導学級の児童を対象にした2024年調査のテストを元に，分析・考察し，児童ができるだけ困難さを伴わず，正確に，アルファベットを習得できるよう，その課題を明確化したい。

2. 関連する研究や実践

我が国の外国語教育の改革は，近年大きく前進している。2017年に告示された『小学校学習指導要領』により，小学校高学年の外国語科に「書くこと」の指導が追加された。児童のアルファベット書き取り能力，習得度合いの状況についていくつかの研究が既になされている。それらの研究のうち，本稿で取り扱った先行研究について紹介する。

石濱は2015年³⁾と2016年⁴⁾の研究で，平成23年度から外国語活動必修化が始まり，『小学校学習指導要領解説外国語活動平成20年8月』において「アルファベットなどの文字指導は，外国語の音声に慣れ親しんだ段階で開始するように配慮する必要がある」⁵⁾とされている中で，アルファベット指導を試みている。2年間にわたって，第5，6学年の同じ児童らにアルファベットの書取調査を指導の事前と事後で行い，授業内では10分間の継

1 奈良教育大学 教職開発講座（教職大学院）
Department of Professional Development in Education, Nara University of Education

続的な指導を行った。そして、どの程度アルファベットと、該当文字が含まれる単語が、書けるようになったかという調査を行った。その結果、単語を書くことは高学年ではかなり難しいことであると述べるものの、練習を重ねていけば、アルファベットを習得することは可能であること、小文字は大文字よりも練習時間を要することなどを報告、継続して文字指導をすれば、児童は徐々に文字を書けるようになっていくことを述べた⁶⁾。酒井、小林、滝沢、伊東らの研究⁷⁾によると、公立小学校第6学年98名に対して音声を聞かずにアルファベット順に書くという調査を行い、大文字と小文字について、どの程度習得しているか、また、誤答については、どの文字がどのような間違いが起きやすいのかなどを多角的に分析し、その結果、大文字より小文字の習得の方が難しいこと、小文字は大文字ほど弁別の特徴が少なく、形態的類似性を持つ文字が、学習を困難にしていることなどを示唆し、さらに英語の文字指導について、①文字の音とアルファベットの順番を覚える指導、②大文字と小文字の区別を明確に指導、③四線上の配置を意識させる指導、この3つの重要性を唱え、外国語として英語を学ぶ初学者がアルファベットをどのように習得していくのかを明らかにした。また辻の研究⁸⁾では、中学校に入学したばかりの生徒を対象にアルファベットの書取調査を行いその結果を分析した。大文字では1割、小文字では2割の生徒が中学入学後に学び直しの必要があることを明らかにした。さらに、誤答については各々の特徴を明らかにし、課題を示しながら、「小学校段階での教材や指導方法の開発が有効である」⁹⁾ことを示唆、小学校でのアルファベット文字指導の重要性を述べた。

油布は、第5学年児童80名に、アルファベット大文字小文字すべてのアルファベットの書取テスト、及びどの文字を書くことが苦手か、どの文字を書くことに難しさを感じるか、アルファベットを書くことは好きか、などのアンケート調査を実施、解答及びアンケートを質的、量的に分析した¹⁰⁾。誤答については、先行研究の辻の研究⁸⁾や酒井らの研究⁷⁾を参考に分析、大文字の方が小文字よりも習得率が高いこと、誤答については先行研究とのある程度の順位相関を得られる結果を出した。児童の誤答には傾向があり、形の似た文字や、鏡映関係にある文字、大文字と小文字とが違う形の文字など、児童は様々な形や音の文字の類別に苦勞しながら習得しようとしていることを述べ、どの程度アルファベットが書けて、そしてアルファベットを習得することにどのような難しさを児童が感じるかを報告した。

3. 研究方法

3-1 研究の目的と課題

本研究は、児童のアルファベット習得の過程を明らかにすることを目的とし、その目的を達成するために、(1)半年で児童はどれくらいアルファベット習得を進めることができたか、(2)半年が経過し、いまなおどの文字に習得の難しさが残るのか、を研究課題とする。研究方法として、油布が2023年度に調査した¹⁰⁾児童らが、半年後、第6学年に進級したあと、どれだけアルファベット習得が進んでいるかを同形態の書取テスト等で調査し、どの文字の習得が比較的容易で、どの文字が未だ習得の難しさが残るのかを2023年度調査と比較しながら縦断的に分析する手法をとる。

3-2 調査対象者

本研究における調査対象者は国立大学附属のA小学校に通う第6学年合計88名である。参加者は、2023年度書取テスト調査以降、1～2時間のアルファベット大文字小文字への指導と、第6学年への進級後は、授業の中でその時間の目標表現を1～2文書く学習を行っている。

3-3 調査時期

2024年6月に実施した。

3-4 調査の内容

アルファベットの大文字小文字の書取テスト及びアルファベットを書くことについてのアンケートを実施した。テスト内容は、アルファベットをいわゆる「名前読み」^{注1)}で教

師（筆者）がランダムに 2 回ずつ読み上げ、所定のテスト用紙の 4 線上に、大文字小文字の順番でアルファベットを書き取るものである。

なお、調査実施前に調査の目的やデータの活用について伝え、調査結果は成績等には一切関係のないこと、情報を適切に扱うこと等の説明を行った。

表 1 2023 年度書取テストと 2024 年度書取テストの概要

	2023 年度書取テスト	2024 年度書取テスト
実施時期	2023 年 11 月	2024 年 6 月
読み上げ	3 回（要望があれば 1, 2 回追加） 児童が聞き取れない時はカタカナ読みで発音（「V」を「ブウイ」「Z」を「ゼット」など）	2 回
解答用紙	4 線は設けない	4 線上に記入
出題方法	アルファベットを「名前読み」でランダムに読み上げ、大文字小文字の順で、児童は解答する	左記に同じ

4. 調査の結果と分析

4-1 書取テストの結果

この調査結果を分析するにあたり、油布（2024）との比較を行う。半年間で学習がどの程度進んだかを正確に比較するために、単年のみ解答した児童の答えは調査から除外し、調査対象者を両年度とも 79 名とした。2023 年度と 2024 年度の書取テスト結果を表 2 に示した。詳しくは本稿末の別表 1 を参照されたい。

アルファベットの名前読みを聞き、すべての文字を間違いなく書き取ることができた児童は 2024 年度書取テストでは 79 名中 23 名（29.1%）で、2023 年度書取テストでの 13 名（16.5%）から高くなり、半年間で学習が進んだことがわかる。以降比較する割合を「2023 年度書取テスト→2024 年度書取テスト」の順で記述する。

表 2 2023 年度と 2024 年度の書取テスト結果

調査年度	調査対象者	大文字 小文字 とも誤 答無し	誤答数							
			大文字				小文字			
			誤答無し	1-5 文字以内	6-13 文字	14文字 以上	誤答無し	1-5 文字以内	6-13 文字	14文字 以上
2023	79 名	13 名	26 名	43 名	9 名	1 名	15 名	40 名	17 名	7 名
	100.0%	16.5%	32.9%	54.4%	11.4%	1.3%	19.0%	50.6%	21.5%	8.9%
2024	79 名	23 名	35 名	37 名	7 名	0 名	24 名	32 名	18 名	5 名
	100.0%	29.1%	44.3%	46.8%	8.9%	0.0%	30.8%	40.5%	22.8%	6.3%

4-2 書取テストの誤答について

(1) 誤答文字数の分析および比較

表 2 で示した通り、誤答数が「1-5 文字以内」の児童は、大文字 54.4%→46.8%、小文字 50.6%→40.5%と若干の数字の改善が見られた。誤答数が「14 文字以上」の割合を見たとき、大文字 1.3%→0.0%、小文字 8.9%→6.3%となり、習得が進んだ様子が見える。しかし、誤答数が 6～13 文字については、大文字 11.4%→8.9%、小文字 21.5%→22.8%と、小文字については割合が増えた。

総合的にみると、表 1 で示したように書取テストの実施方法が 2023 年度と 2024 年度では相違点があり、2024 年度の方が書取テストの難易度は上がっている。その点を考慮すると、どの割合も大きな増減が見られないことから、習得状況は良くなったと捉えることは可能である。

(2) 各文字別誤答数の分析及び比較

表 3, 図 1 に文字別の誤答数とその総数を示した。この誤答数には何も書けなかった解答である無答も含まれている。誤答数は 2023 年度, 2024 年度の比較で大文字 (162→156) 小文字 (396→329) と減少した。大文字と小文字の誤答数の上位を比較すると, 大文字 1, 2 位の「I」と「J」は, 両年とも順位に変動がなく, この 2 文字の習得が困難なことが分かる。「I」は上下の水平の横棒を書けていないケースが多く, 「J」は鏡文字としての誤答が 2023 年度に引き続いて多く見られた。ただ, 誤答数自体は「I」は 2024 年度では半分程度に減少 (35→18), 「J」も三分の一程度減少し (30→18), 習得が進んだと言える。2023 年度 3, 4 位の「M」(10→10), 「N」(13→13) も児童にとっては習得の難しい文字である。多くの文字で誤答数が減少している中「V」, 「v」(6→14), 「Z」(3→17), 「z」(4→17) の誤答数が増えたのは, 2024 年度書取テストで限られた回数, 正しい発音でアルファベットを読み上げたため, 音声の混同が生じたと考えられる。児童の音韻認識能力の課題が見える結果となった。

小文字は, 2023 年度の上位では, 「q」(39), 「l」(37), 「j」(36) と多く, 「d」 と 「n」(24), 「f」と「g」(23) と続く。2024 年度も「j」(30), 「q」(27) が依然多く, 「g」(23), 「l」と「p」(20) と続く。両年とも上位は「j」, 「q」, 「l」であり, これらは児童にとって習得の難しい文字だと言える。小文字の習得は大文字よりも難しい。大文字よりも小文字の誤答数が多い理由として, アレン玉井は, 「大文字が左右対称で特徴をつかみやすい形のものが多いのに比べ, 小文字は小文字といわれるだけあり, 字が小さくなるため字形的に目立つところ (これを専門用語で弁別特徴 distinctive features と呼びます) が少なくなり, 認識が難しくなります。」¹¹⁾ とし, 「b-d, p-q を混同したり, j や i の点を忘れてりする」¹¹⁾ のもそのためであると説明している。酒井らも, 「大文字においては各文字が特有の形をしているため, 混乱が起きづらいが, 小文字においては大文字よりも形態的類似性を持つ文字が多くなり, そのため学習を困難にしていると考えられる。」¹²⁾ と, 小文字で誤答が出現しやすい理由を述べている。

表 3 文字別の誤答数

	A	B	C	D	E	F	G	H	I	J	K	L	M	N	O	P	Q	R	S	T	U	V	W	X	Y	Z	総数
2023	0	0	0	2	5	8	4	5	35	30	1	9	10	13	0	4	5	8	2	1	1	6	5	0	5	3	162
2024	0	7	0	2	1	6	11	7	18	18	3	4	10	13	0	2	3	11	1	1	0	14	5	0	2	17	156
	a	b	c	d	e	f	g	h	i	j	k	l	m	n	o	p	q	r	s	t	u	v	w	x	y	z	総数
2023	6	18	0	24	15	23	23	18	12	36	3	37	22	24	0	14	39	21	3	6	14	6	10	0	18	4	396
2024	1	18	1	15	6	18	23	17	7	30	11	20	15	19	0	20	27	16	1	8	7	14	7	0	11	17	329

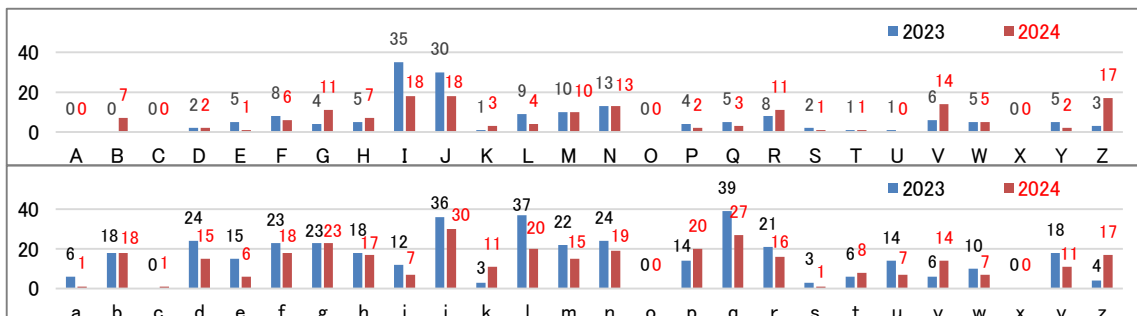


図 1 文字別の誤答数

(3) 誤答カテゴリー

油布 (2024)¹⁰⁾ と同じく辻の研究⁸⁾ の誤答カテゴリーを参考にしながら, 「無答」「鏡文字」「大文字の縮小」「発音及び形の混同」「形の不完全」「その他」で分類し, それらに加えて「類似形の鏡文字」「類似形の誤答」「小文字の拡大」も分析項目に加えた¹⁰⁾。

(4) 誤答カテゴリー別の分析及び比較

以下に 2023 年度と 2024 年度の手取テストでの誤答を誤答カテゴリー別に分類し、分析・比較した。

①無答

無答は、アルファベット文字の名称を聞いて何も書けなかった解答である。表 4、図 2 に示した通り、無答は 2023 年度、2024 年度の比較で大文字 (71→46) 小文字 (153→98) と減少したものの、依然一番多い誤答カテゴリーである (別表 1)。2024 年度で無答数はかなり減少し、そのことで習得が進み、該当のアルファベット文字を書き出せる知識が付き始めたと言える。無答が減少したのは何故か、その減少分が、正答になったのか、違う誤答になったかは精査されるべきところである。少なくとも、誤答であっても何かが書けたということである。どのような誤答であったか、各誤答カテゴリーを精査しつつ分析を進めたい。

表 4 無答による文字別誤答数

	A	B	C	D	E	F	G	H	I	J	K	L	M	N	O	P	Q	R	S	T	U	V	W	X	Y	Z	総数
2023	0	0	0	2	1	5	3	4	5	5	0	4	2	9	0	3	4	6	1	1	0	5	4	0	5	2	71
2024	0	0	0	2	0	3	3	6	2	2	0	1	2	3	0	2	1	8	1	1	0	2	1	0	2	4	46
	a	b	c	d	e	f	g	h	i	j	k	l	m	n	o	p	q	r	s	t	u	v	w	x	y	z	総数
2023	0	3	0	8	3	10	11	11	5	8	1	9	8	12	0	10	14	14	2	2	1	5	8	0	6	2	153
2024	0	2	0	3	4	8	8	11	2	3	0	7	3	6	0	5	8	12	1	1	1	2	2	0	3	6	98

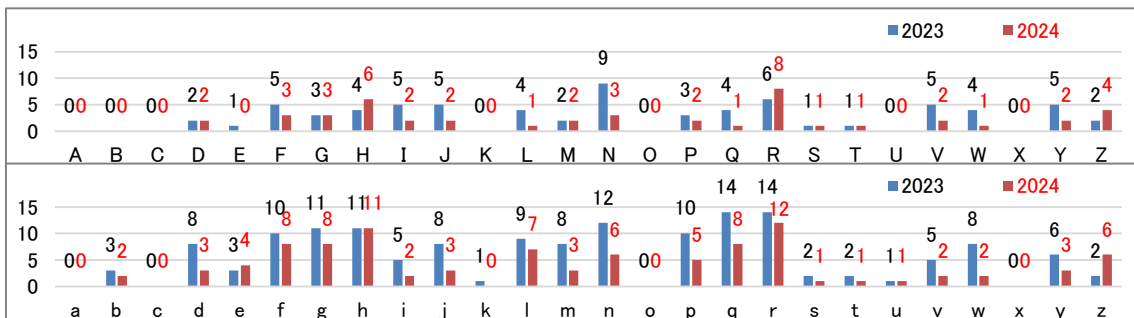


図 2 無答による文字別誤答数

②鏡文字

表 5、図 3 が示すように、鏡文字による誤答の大部分は「J」である。2023 年度、2024 年度の比較では大文字 (21→8)、小文字 (19→7) と半分以下に減ったものの、大小文字とも鏡文字が依然残った解答が散見された。アレン玉井が「J については日本語からの干渉ではないかと考えられる」¹³⁾ と述べているように、ひらがなの「し」の影響は強いと考えられる。このことについて、酒井らは、「母語習得や外国語習得において広く見られる現象で、様々な文字において生じる可能性があり、特に指導に力点を置かなくても自然に修正されて学ばれていく可能性があるのではないか。」¹⁴⁾ と述べている。

表 5 鏡文字による文字別誤答数

	A	B	C	D	E	F	G	H	I	J	K	L	M	N	O	P	Q	R	S	T	U	V	W	X	Y	Z	総数
2023	0	0	0	0	0	1	0	0	0	21	0	0	0	0	0	0	0	0	1	0	0	0	1	0	0	0	24
2024	0	0	0	0	0	0	0	0	0	8	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	8
	a	b	c	d	e	f	g	h	i	j	k	l	m	n	o	p	q	r	s	t	u	v	w	x	y	z	総数
2023	2	0	0	0	1	0	0	0	0	19	0	0	0	0	0	0	0	0	1	0	1	0	0	0	0	0	24
2024	0	0	0	0	0	1	0	0	0	7	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	8

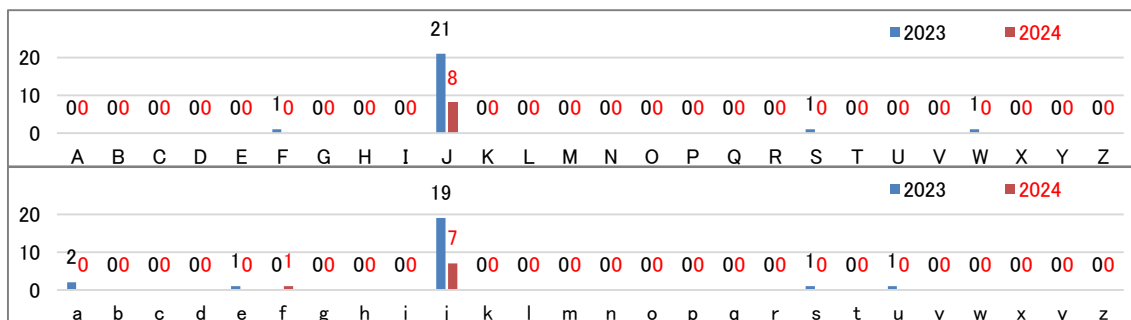


図3 鏡文字による文字別誤答数

③小文字の拡大/大文字の縮小

大文字の誤答「小文字の拡大」は、「J」が(2→3)、「Q」(1→1)であったものの、総数を見ると(7→5)と減少し改善が見られた(表6, 図4)。同様の誤答である小文字の「大文字の縮小」も、総数では(140→59)と半分以下に減少した。2023年度の誤答件数が22と一番多かった「l」と「q」は、2024年度では、半分以下の8と12に減少した。しかし、依然1, 2位の誤答数である。大文字の「L」「Q」を縮小するという誤答であるが、「q」は形が大文字と大きく変わることが定着の難易度を上げている。また、小文字の「l」は、大文字「I」との類似が、知識の定着を妨げていると考えられる。さらに、両文字とも、ローマ字に含まれない「Cc, Ff, Jj, Ll, Qq, Vv, Xx」で、ローマ字での未習とアルファベット習得の難しさには関連性があると推測できる。

表6 小文字の拡大/大文字の縮小による文字別誤答数

	A	B	C	D	E	F	G	H	I	J	K	L	M	N	O	P	Q	R	S	T	U	V	W	X	Y	Z	総数
2023	0	0	0	0	0	0	0	0	2	2	1	0	1	0	0	0	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	7
2024	0	0	0	0	0	0	0	0	1	3	0	0	0	0	0	0	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	5
	a	b	c	d	e	f	g	h	i	j	k	l	m	n	o	p	q	r	s	t	u	v	w	x	y	z	総数
2023	0	2	0	8	6	6	11	5	2	6	0	22	9	8	0	0	22	5	0	4	11	0	0	0	12	1	140
2024	0	0	0	3	1	5	6	3	0	0	0	8	5	5	0	0	12	2	0	4	0	0	0	0	5	0	59

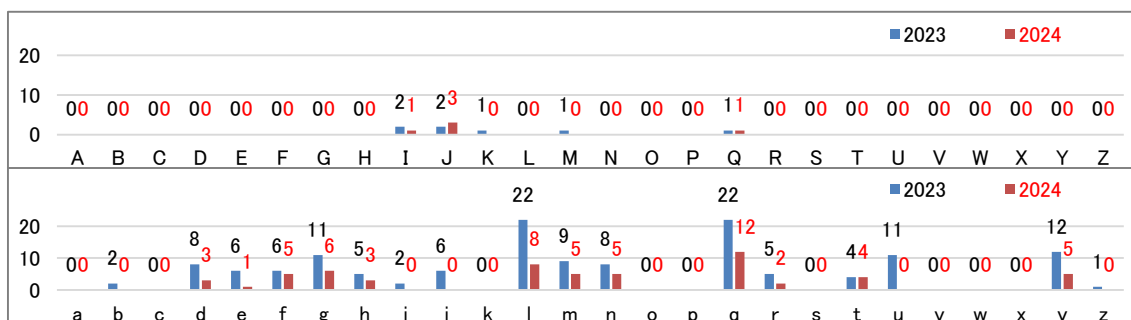


図4 小文字の拡大/大文字の縮小による誤答数

④発音と形の混同

2024年度書取テストは、正しいアルファベットの発音を限られた回数の中で読み上げた。2023年度は、「分からない」という児童にカタカナ読みのヒントも与えたが、2024年度はそれに応じない形式とした。ゆえに2024年度は、「V(1→12)」と「B(0→7)」、「G(0→8)」と「Z(1→13)」、「M(4→8)」と「N(4→8)」などの混同が大いに見られ、大文字(20→59)・小文字(14→48)とも誤答総数が3倍程度増加した(表7, 図5)。2023年度書取テストで「アルファベットを書くことはできた」が、2024年度で正しい発音でアルファベットを読み上げられたときに、「どのアルファベットか正しく認識できない」という状態が起きた。この要因は、日本語母語話者にとって識別が難しい音素を混同しており、「音韻認識(phonemic awareness)が育っていない」

「アルファベットレベルで音声と文字が結び付けられていない」、「アルファベット全般にわたっての音声と文字を結ぶ指導と定着が不足している」などが考えられる。児童の「音韻認識能力」(phonemic awareness)をどのように正しく、十分に育成していくかは大きな課題である。

表7 発音と形の混同による文字別誤答数

	A	B	C	D	E	F	G	H	I	J	K	L	M	N	O	P	Q	R	S	T	U	V	W	X	Y	Z	総数
2023	0	0	0	0	1	1	0	1	0	0	0	5	4	4	0	0	0	1	0	0	1	1	0	0	0	1	20
2024	0	7	0	0	0	2	8	1	0	0	0	0	8	8	0	0	0	0	0	0	0	12	0	0	0	13	59
	a	b	c	d	e	f	g	h	i	j	k	l	m	n	o	p	q	r	s	t	u	v	w	x	y	z	総数
2023	1	0	0	0	2	1	1	0	0	0	0	2	2	1	0	0	0	1	0	0	1	1	0	0	0	1	14
2024	1	7	0	0	1	0	7	2	0	0	0	0	5	4	0	0	0	0	0	0	0	10	0	0	0	11	48

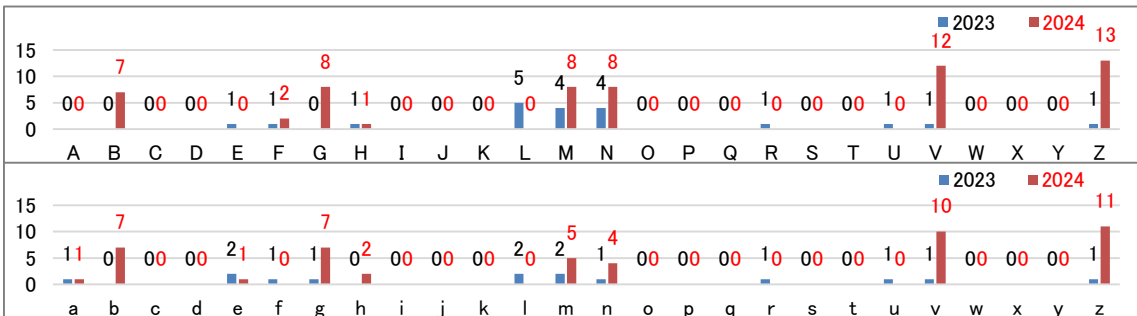


図5 発音と形の混同による文字別誤答数

⑤形の不完全

表8, 図6で示した通り, 形の不完全の誤答総数で見ると大文字は(28→25), 小文字は(11→63)と増加した。2023年度書取テストでは, 誤答として現れなかった文字が2024年度では誤答として現れたカテゴリーであった。2024年度書取テストでこの誤答が現れた文字は, 「K」「L」「b」「d」「l」「q」「t」「u」「y」で, ことに小文字の増大は顕著であった。

表8 形の不完全による文字別誤答数

	A	B	C	D	E	F	G	H	I	J	K	L	M	N	O	P	Q	R	S	T	U	V	W	X	Y	Z	総数
2023	0	0	0	0	0	0	0	0	27	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	28
2024	0	0	0	0	0	0	0	0	15	5	3	2	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	25
	a	b	c	d	e	f	g	h	i	j	k	l	m	n	o	p	q	r	s	t	u	v	w	x	y	z	総数
2023	0	0	0	0	0	1	0	0	3	2	2	0	0	0	0	1	0	0	0	0	0	0	2	0	0	0	11
2024	0	2	0	2	0	1	0	0	4	20	11	3	0	0	0	6	3	0	0	2	6	0	1	0	2	0	63

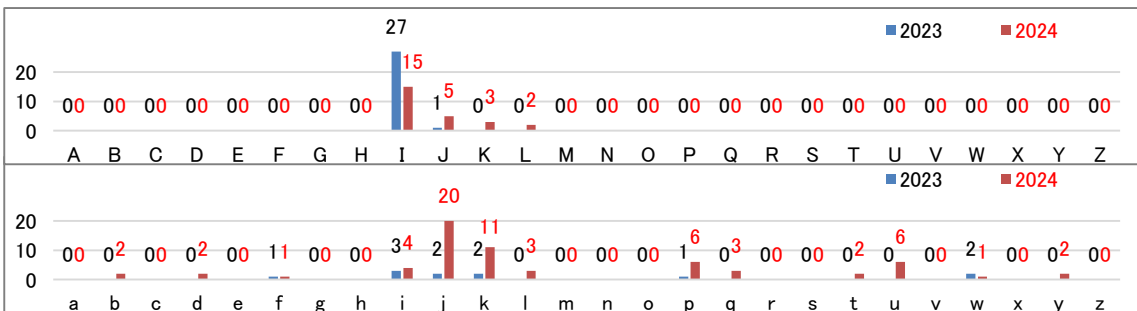


図6 形の不完全による文字別誤答数

2023年度書取テストから半年経過し, どの誤答カテゴリーも概ね誤答数は減少傾向である中で, 何故「形の不完全」の誤答, 特に小文字でこの誤答数が増加したのであ

ろう。そのことを2024年度の誤答カテゴリ中の「無答」数が減少したことや、他の誤答カテゴリの減少分が本カテゴリに移行したのではないかと、という仮説を立て分析を進めた。例えば、「大文字の縮小」の誤答カテゴリは、aからzの総数で(140→59)と半分以上減少した(表6, 図4)。推測するに、大文字をただ縮小する文字は「cosvwxyz」だけだという知識はかなり定着したが、2023年度書取テストで無答であった文字について解答欄に何か書き出した結果、別カテゴリの誤答となった、とも考えられる。「無答」は、何も書けなかった解答である。アルファベットの読み上げを聞いても、どの文字か分からない、音は取れたとしても、その文字の形自体を正確に覚えていないため、音と形を結び付けることができず、書くに至れなかった解答である。その誤答が減ったのは、正答か、何かは書いたが間違えたということであり、これは児童のアルファベットの「習得過程」を表していると仮定し、その内容をさらに精査し、習得の手立てを見つけることが肝要であると考えた。その方法として、表9に示した通り酒井ら⁷⁾を参考にこの誤答カテゴリをさらに細かく分析した。

表9 2024年度書取テスト「形の不完全」の誤答分析(上位3文字)

	①大きさ長さの誤り	②配置の誤り	③単なる形の不完全	④混合	合計数
I	0	0	15	0	15
j	10	1	1	8	20
k	11	0	0	0	11
合計	21	1	16	8	46

2024年度書取テストで「形の不完全」の誤答数が多かった上位3文字、「I」の15件、「j」の20件、「k」の11件、合計46件について「①大きさ・長さの誤り」、「②配置の誤り」、「③単なる形の不完全」、「④混合」で分けた(表9)。分析の結果、①大きさ長さの誤りが21件で45.7%、③単なる形の不完全が16件で34.8%、②配置の誤りは1件で2.2%と④混合(一つのカテゴリでは誤答を説明できない)は8件で17.4%であった。なお、②配置の誤りと④混合の誤りは小文字の「j」のみに見られた。

一番多い15件の誤答は大文字「I」の③「単なる形の不完全」で、上下の横棒が無い状態の誤答が14件あった。この誤答をした生徒の2023年度書取テストを調べると10人が全て同じ誤答内容であり、大文字「I」の習得が上手くできていない様子が浮き彫りになった。上下横棒の無い大文字「I」は小文字の「l」になってしまう。大文字の「I」と小文字の「l」を混同しないよう正しい形を習得させることが大切である。小文字「j」の誤答①「大きさ長さの誤り」は10件である。10件の誤答すべて、1線と2線の間に点を打ち、正しくは下の部分は2~4線に書くべきところを、その下の部分を2線と3線の間に小さく書き、誤答となっていた。同じくこの誤答をした生徒の2023年度書取テストを調べると「点がない」2件、「鏡文字」2件、「無答」1件、「2023年度書取テストでは4線が無かったため正解している」4件、その他1件となっており、2024年度書取テストでは、形は正しく取れるようになった生徒は増えたが、4線上では正しく書けなかったために誤答となっていた。

このことから、指導者は図7に示す通り、アルファベットの書き方を4線との位置関係に留意して指導する必要がある。小文字の「j」は1線と2線の間に点を打ち、下部を2線から4線まで伸ばすこと、大文字の「J」は1線から3線の間に書くことなど線上の高さの違いは、黒板等で示す際に、強調して指導し、大文字と小文字で異なることを意識させなければならない。また、小文字の「k」の①大きさ長さの誤りも11件と多い。これは、大文字「K」との混同による誤答である。これも大文字と小文字の僅かな違いを明示的に確実に指導する必要がある。

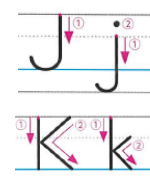


図7 英文字の書き方¹⁵⁾

⑥類似形の鏡文字

表 10、図 8 に示した通り、類似形の鏡文字による誤答は、2023 年度、2024 年度ともに、小文字「b」と「d」、 「p」と「q」で特に多く現れた誤答である。大文字については、2023 年度に M の 1 件あったのみで、これは大文字の中に左右で鏡文字になる文字が存在しないからであろう。小文字での誤答数は b (11→6)、 d (6→4)、 j、 m (1→0)、 p (3→7)、 q (0→2) となっており、誤答が残りやすく、ことに「b・d」の区別に児童が苦しむ様子が伺える。

表 10 類似形の鏡文字による文字別誤答数

	A	B	C	D	E	F	G	H	I	J	K	L	M	N	O	P	Q	R	S	T	U	V	W	X	Y	Z	総数	
2023	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1
2024	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
	a	b	c	d	e	f	g	h	i	j	k	l	m	n	o	p	q	r	s	t	u	v	w	x	y	z	総数	
2023	0	11	0	6	0	0	0	0	0	1	0	0	1	0	0	3	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	22	
2024	0	6	0	4	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	7	2	0	0	0	0	0	0	0	0	0	19	

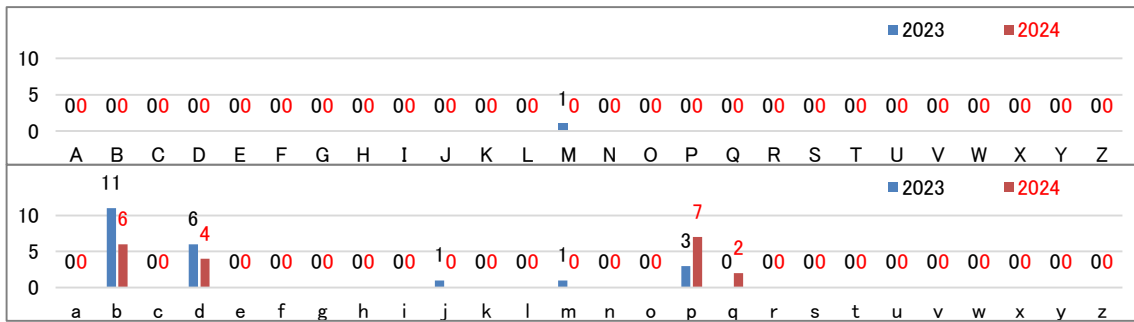
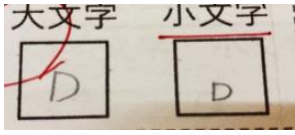
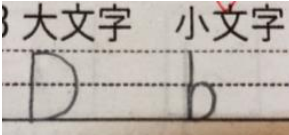
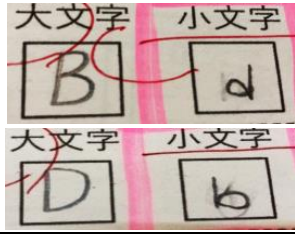
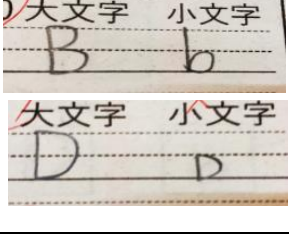
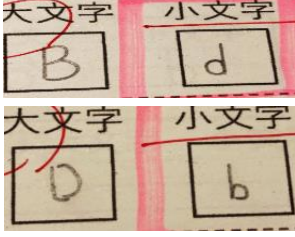
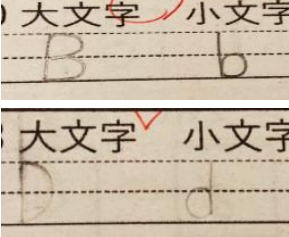


図 8 類似形の鏡文字による誤答数

2023 年度に本誤答カテゴリーで誤答となった 22 件について同じ児童が 2024 年度ではどのような解答になっているか調べると、22 件のうち、16 件が正しく書けるようになっており、習得の進んだ様子が伺える。しかし 2024 年度書取テストでの「類似形の鏡文字」誤答総数は 19 件となっており、半年経過して、間違える児童は変わっても、同じ数くらいの誤答が出現するという事は、習得には時間がかかる、指導に留意すべき誤答カテゴリーだと言える。表 11 に 2024 年度書取テストで「類似形の鏡文字」カテゴリーで誤答した児童が、2023 年度書取テストはどのような解答をしていたかを示した。この解答例は、2024 年度書取テストで、誤答ではあるが、無答ではなく、正答に近づこうとした誤答例である。習得への手立てを読み取る好例としたい。「該当する誤答カテゴリー」に記したように、例 1 の「D」と「d」は、大文字と小文字で形が違うという知識はついたが、類似形の「b」と混同してしまった例である。例 2 は、小文字「b」の知識は定着したが、「D」と「d」では大文字と小文字で形が違うという知識が定着せず、大文字「D」をそのまま小さく書いている例である。例 3 は、「類似形の鏡文字」については知識が定着したが、「D・d」に正答を書いたものの消していることから、正しい文字の形はおそらく習得しているが、2024 年度書取テストのように正しいアルファベットの発音で読み上げられた時に音声から文字への認識が上手くいかず、「発音と形の混同」が起きたのか自信を持って解答できなかったと考えられる。

表 11 習得の過程の解答例

	2023 年度	2024 年度	該当する誤答カテゴリー
例 1			2023 年度は「大文字の縮小」 2024 年度は「類似形の鏡文字」 「b」と「d」の混同
例 2			2023 年度は「b・d」とも「類似形の鏡文字」 2024 年度は「b」は正答、「d」は「大文字の縮小」
例 3			2023 年度は「b」「d」とも「類似形の鏡文字」 2024 年度は「b」は正答、「D・d」は正答を書いたものの消していることから「発音と形の混同」の可能性

⑦類似形の誤答

表 12 の通り、総数では、大文字は (3→2) , 小文字が (19→13) と減少している。小文字では、改善が大きかった順に a (3→0) , f (4→1) , h・n (2→0) , q (3→2) , l (1→0) で、逆に誤答が増えたものは d (2→3) , g・p・t (0→1) であった。混同している文字の例は、「q」→「d」, 「f」→「t」, 「q」→「g」, 「d」→「p」, 「t」→「J」, 「d」→「g」, 「g」→「q」などであり、類似形の文字の識別が難しいことがわかる。

表 12 類似形による文字別誤答数

	A	B	C	D	E	F	G	H	I	J	K	L	M	N	O	P	Q	R	S	T	U	V	W	X	Y	Z	総数
2023	0	0	0	0	0	1	0	0	0	1	0	0	0	0	0	0	0	1	0	0	0	0	0	0	0	0	3
2024	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1	0	0	0	0	0	1	0	0	0	2
	a	b	c	d	e	f	g	h	i	j	k	l	m	n	o	p	q	r	s	t	u	v	w	x	y	z	総数
2023	3	1	0	2	0	4	0	2	1	0	0	1	0	2	0	0	3	0	0	0	0	0	0	0	0	0	19
2024	0	1	0	3	0	1	1	0	1	0	0	0	0	0	0	1	2	0	0	1	0	0	1	0	1	0	13

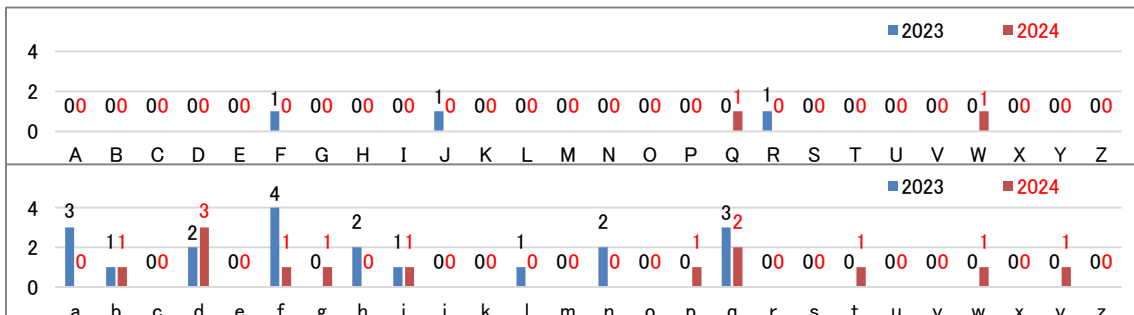


図 9 類似形の誤答による文字別誤答数

⑧その他

表 13 に示す通り、「その他」カテゴリーには、誤答カテゴリーが複数入ったものを分類した。例えば、「E」や「e」の解答欄に「発音と形の混同」をして「I」や「i」と誤答しさらに、「i」の点が無いなどの「形の不完全」誤答も含むものである。また

「W」や「w」の解答欄に「R」や「r」を書くなど、当て推量で書いたと予想される
 どの誤答カテゴリーにも属さない誤答も含めた。

表 13 その他の誤答による文字別誤答数

	A	B	C	D	E	F	G	H	I	J	K	L	M	N	O	P	Q	R	S	T	U	V	W	X	Y	Z	総数
2023	0	0	0	0	3	0	1	0	1	0	0	0	2	0	0	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	8
2024	0	0	0	0	1	1	0	0	0	0	0	1	0	2	0	0	0	3	0	0	0	0	3	0	0	0	11
	a	b	c	d	e	f	g	h	i	j	k	l	m	n	o	p	q	r	s	t	u	v	w	x	y	z	総数
2023	0	1	0	0	3	1	0	0	1	0	0	3	2	1	0	0	0	1	0	0	0	0	0	0	0	0	13
2024	0	0	1	0	0	2	1	1	0	0	0	2	2	4	0	1	0	2	0	0	0	2	3	0	0	0	21

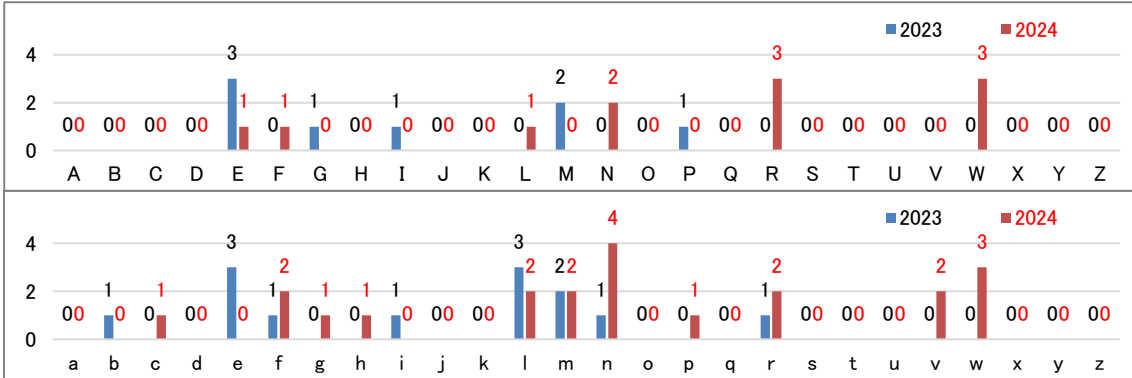


図 10 その他の誤答による文字別誤答数

5. 考察とまとめ

本研究の目的は、児童のアルファベット習得の過程を明らかにすることであり、研究課題は、(1) 半年で児童はどれくらいアルファベット習得を進めることができたか、(2) 半年が経過し、いまなおどの文字に習得の難しさが残るのか、であった。アレン玉井は、アルファベット学習は以下の5段階、「①文字の形を正しく認識できる。②英語の音で文字の名前を理解することができる。③文字の名前を聞いて、それに対応する文字が理解できる。④文字を見て、英語の音でその名前を言うことができる。⑤文字の名前を聞いて、それに対応する文字を書くことができる。」¹⁶⁾を経て習得できるとしている。

(1) 半年で児童はどれくらいアルファベット習得を進めることができたか、については、2023年度、2024年度で比較すると、「4-2 (1) 誤答文字数の分析および比較」, 「4-2 (2) 各文字別誤答数の分析及び比較」のとおり、習得が一定進んでいることが見てとれる。例えば、各文字の誤答数は、2023年度書取テスト¹⁰⁾では、大文字では1位は「I」が35件、2024年度は18件と半減した。そして、2024年度の1位は「I」と「J」で18件であったが、「J」も2023年度は30件であったので、4割の減少が見られる。小文字においても1位は「q」の39件で、約2人のうち1人が誤答していたが、2024年度は2位になり、27件と減少した。2024年度の1位は「j」が30件で、2023年度の36件よりは若干の減少が見られた。これらの結果を総観すると、習得は進んだと言えるであろう。他の文字についても、誤答数は全体的に減少しており、大文字小文字共に習得が進んだ結果となった。同学年の児童らを対象にした酒井らの先行研究と比較をしても、例えば大文字において、「アルファベット最初の7文字 (A~G) の正答率は90%を超えた。」¹⁷⁾とあるが、2023年度書取テストで96.6%、2024年度でも95.1%で、同様の習熟度を見ることができた。

2024年度書取テスト結果では、無答数が減り、その他の誤答数が増加した。ことに小文字における「形の不完全」による誤答が増えた。著者はこれを「習得途上」の現象と捉えたい。児童は「無答」から「誤答」へと、様々な解答の形を経ながら段階的に正しく文字を習得していくのではないか。しかし、習得の進まない文字はある。その文字が、何故習得が難しく、児童は習得に困難さを覚えるのであろうか。

(2) 半年が経過し、いまなおどの文字に習得の難しさが残るのかについては、4-2 (4) 誤答カテゴリー別の分析及び比較結果から、「I」, 「l」, 「j」, 「b・d」, 「p・q」, 「B・V」, 「G・Z」, 「M・N」などである。以下に詳しく述べる。

まずは数の上でも誤答数が多く表れている文字は、大文字「I」と小文字「l」である。「4-2 (4) ⑤『形の不完全』」で述べたとおり、混同により習得が難しい文字といえる。次に「j」があげられる。「4-2 (4) ⑤『形の不完全』」で述べたとおり「j」については大文字と小文字は似ているが、小文字には点が必要である。大きさも大文字は1線から3線の間書き、小文字は2~4線に書く。大文字と小文字で書き始めの4線の位置の違いによる混同があり、さらに小文字で4線まで使う文字は「g」, 「j」, 「p」, 「q」, 「y」の5文字のみで書きなれていない。「j」のみ、「形の不完全」による誤答分析内の「混同」(「大きさ長さの誤り」「配置の誤り」「単なる形の不完全」すべて該当) 誤答が8件もあり、この文字の習得には何重もの難しさを児童が感じている実態がわかった。「j」についてはさらに「4-2 (4) ②『鏡文字』」による習得の難しさもある。同じく「4-2 (4) ⑥『類似形の鏡文字』」で述べた「b・d」, 「p・q」は、実際にその鏡映形が別の文字として存在するところにあり、児童はその区別に困難さを覚える。さらに、「q」があげられる。「q」の「大文字の縮小」による誤答が多いことは、「4-2 (4) 『③小文字の拡大/大文字の縮小』」でも述べた。酒井ら⁷⁾が、国立教育政策研究所¹⁸⁾と石濱⁴⁾の調査結果から「小文字の困難度」を比較した表¹⁹⁾を示しているが、石濱⁴⁾も酒井ら⁷⁾も困難度の1位は「q」で(石濱は「p, j」が同1位)、油布¹⁰⁾でも同じく1位で、本研究でも2位と、「q」が児童にとって非常に習得しにくい文字であることがよく分かる。石濱の2回にわたる書取テスト^{3) 4)}のうち、2回目の事前・事後どちらの書取テストでも小文字の「q」は正答率が(18.2%)²⁰⁾である。

アレン玉井²⁾が言うように、児童のアルファベット習得において、「音韻認識能力」の育ちは重要である。2024年度に正しい読み上げでの書取テストを実施したことで、「4-2 (4) ④『発音と形の混同』」で述べたとおり、「発音と形の混同」による誤答が2023年度より大文字20→59、小文字14→48と3倍程度増加した。大文字では、「V (1→12)」と「B (0→7)」, 「G (0→8)」と「Z (1→13)」, 「M (4→8)」と「N (4→8)」などの混同が見られた(表7, 図5)。小文字では、ほぼどの文字も誤答率は改善されている中、「b」は誤答数が兩年とも18で変化が無く、上記内容の実証で、「音韻認識能力」が十分に育っていないことが現れたと言える(表7, 図5)。2024年度書取テストで正しい発音で読み上げたことにより誤答が増えたことは、「②英語の音で文字の名前を理解することができる。」¹⁶⁾という段階の躓きで、それは初歩段階であり、そこをクリアせずにアルファベットの習得は成されない。音韻認識能力を育てることは、アルファベット習得のためには大変重要である。酒井らは、音の混同が起きやすい文字群について、特に順番も近い「L・M・N」が、「音声的にも類似しており、アルファベット順も隣接している文字であり、混乱を招きやすい文字である」¹²⁾と述べている。本研究でもことに「N・M」「B・V」「G・Z」の混同は多く見られ、どのように児童の音韻認識能力を育てるかは大きな課題と言えよう。

ローマ字に無い文字の習得も児童の大きな課題であるが、例えば、表3, 図1の通り、誤答順位の高い大文字「J」の誤答数は、30→18と減少している。同じく小文字で順位の高い「q」も39→27と減少した。小文字の「l」も37→20と改善が見られる中、小文字の「j」だけは、36→30と改善率の値が他よりもかなり低く、習得の難しさが見て取れる。鏡文字誤答が多い印象だが、詳しく分析した表9では、正しい大きさと正しく4線上に書けていない誤答も目立った。児童の習得度合いに十分配慮しながら指導したい文字である。

6. 本研究の限界と今後の課題

本研究では、筆者が関わる小学校第6学年児童に、2023年度に続きアルファベットを書く力を調査し、その結果を比較し分析した。しかし研究方法においては改善の余地がある。関わって3点を以下に示す。1点目は、2023年度と2024年度の書取テストの実施方法について、4線の使用や読み上げ方などが、一部異なっている。2点目は、一校調査で調査対象

者も一つの学年の児童に限られた点である。3点目は、参加者の中には文字を書くことについて特性を持っている児童がいる可能性もあるが、2024年度の研究では、考慮していない。

本研究の結果に基づいて、今後、アルファベット指導において注力すべき点をまとめると、第一に、4線を意識した指導を、「文字の大きさを正確に取るため」と「正しい文字の位置取りを行うため」に行うべきである。第二に、音を正しく掴む指導、つまり「音韻認識能力」を高める指導を行うことである。それらを総合して、音素的にも形状的にも「類似している文字」を正確に区別できる力を育てる指導が大切である。

今後は、以上のような文字指導に注力した教材や指導方法の開発を行い、実際の教場で生かされるよう、さらにアルファベット習得についての研究を重ねていきたい。

付記

本研究は、第24回小学校英語教育学会中国・山口大会にて口頭発表した内容を加筆修正したものである。本研究に多大なるご協力をいただいた小学校の校長先生並びに教職員の先生方、児童に深く感謝の意を表す。なお、本論文に関して、開示すべき利益相反関連事項はない。

注釈

注1) 「Aの場合、この字形が/ei/という名前である」²⁴⁾ので、その名前で読むこと。

引用・参考文献

- 1) 文部科学省：『小学校学習指導要領（平成29年告示）解説外国語活動・外国語編』，開隆堂出版，p.63（2018）
- 2) アレン玉井光江：『小学校英語の文字指導：リタラシー指導の理論と実践』，東京書籍，p.3（2019）
- 3) 石濱博之：「外国語活動の授業でアルファベットを書く練習を導入した事例報告」，『中部地区英語教育学会紀要』，44，pp.133-140（2015）
- 4) 石濱博之：「ある公立小学校の外国語活動におけるアルファベットを書くことの指導に関する事例報告：継続した指導結果を比較して」，『中部地区英語教育学会紀要』，45，pp.163-170（2016）
- 5) 文部科学省：『小学校学習指導要領解説外国語活動編 平成20年8月』，文部科学省，東洋館出版社，p.19（2008）
- 6) 4)と同稿，p.163
- 7) 酒井英樹，小林比出代，滝沢雄一，伊東哲：「外国語として英語を学ぶ初学者によるアルファベットの手書き文字」，『日本児童英語教育学会研究紀要』，37，pp.1-18（2018）
- 8) 辻伸幸：「中学校入学時における生徒が有する英語の文字習得上の課題」，『和歌山信愛大学教育学部紀要』，4，pp.1-10（2023）
- 9) 8)と同稿，p.9
- 10) 油布茂子：「小学校高学年における『書くこと』の困難さに関する考察：5年生児童のアルファベット習得に焦点を当てて」，『奈良保育学院紀要』，21，pp.31-48（2024）
- 11) アレン玉井光江：「英語のつまずきは、アルファベットから!? ～大人が気がつきにくい落とし穴～：第2回「小文字って、結構大変。」」，『ARCLE Reports コラム』，2014.10.29，<https://www.arcle.jp/note/2014/0007.html>（2024.8.30）
- 12) 7)と同稿，pp.14-15
- 13) アレン玉井光江：「小学生のアルファベット知識について」，『ARCLE review：研究紀要』，No.1，p.76（2006）
- 14) 7)と同稿，p.16

- 15) アレン玉井光江 ほか：『New horizon elementary : English course5』，東京書籍，裏表紙（2020）
- 16) 2) と同稿，p.29
- 17) 7) と同稿，p.13
- 18) 国立教育政策研究所：『平成20年度「小学校における英語教育の在り方に関する調査研究」成果報告書』（2009），https://www.nier.go.jp/shoei_h20/shoei.html（2024.8.30）
- 19) 8) と同稿，p.9
- 20) 4) と同稿，p.170
- 21) 13) と同稿，pp.72-83
- 22) 文部科学省：『小学校学習指導要領（平成29年告示）解説外国語活動・外国語編』（2017）
- 23) 文部科学省：『小学校学習指導要領解説外国語活動編平成20年8月』（2008）
- 24) 2) と同書，p.28

別表 1

大文字の誤答カテゴリ別の件数

(単位：件数)

2023	A	B	C	D	E	F	G	H	I	J	K	L	M	N	O	P	Q	R	S	T	U	V	W	X	Y	Z	総数
無答	0	0	0	2	1	5	3	4	5	5	0	4	2	9	0	3	4	6	1	1	0	5	4	0	5	2	71
鏡文字	0	0	0	0	0	1	0	0	0	21	0	0	0	0	0	0	0	0	1	0	0	0	1	0	0	0	24
小文字の拡大	0	0	0	0	0	0	0	0	2	2	1	0	1	0	0	0	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	7
発音と形の混同	0	0	0	0	1	1	0	1	0	0	0	5	4	4	0	0	0	1	0	0	1	1	0	0	0	1	20
形の不完全	0	0	0	0	0	0	0	0	27	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	28
類似形の鏡文字	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1
類似形の誤答	0	0	0	0	0	1	0	0	0	1	0	0	0	0	0	0	0	1	0	0	0	0	0	0	0	0	3
その他	0	0	0	0	3	0	1	0	1	0	0	0	2	0	0	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	8
総数	0	0	0	2	5	8	4	5	35	30	1	9	10	13	0	4	5	8	2	1	1	6	5	0	5	3	162
2024	A	B	C	D	E	F	G	H	I	J	K	L	M	N	O	P	Q	R	S	T	U	V	W	X	Y	Z	総数
無答	0	0	0	2	0	3	3	6	2	2	0	1	2	3	0	2	1	8	1	1	0	2	1	0	2	4	46
鏡文字	0	0	0	0	0	0	0	0	0	8	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	8
小文字の拡大	0	0	0	0	0	0	0	0	1	3	0	0	0	0	0	0	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	5
発音と形の混同	0	7	0	0	0	2	8	1	0	0	0	0	8	8	0	0	0	0	0	0	0	12	0	0	0	13	59
形の不完全	0	0	0	0	0	0	0	0	15	5	3	2	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	25
類似形の鏡文字	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
類似形の誤答	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1	0	0	0	0	0	1	0	0	0	2
その他	0	0	0	0	1	1	0	0	0	0	0	1	0	2	0	0	0	3	0	0	0	0	3	0	0	0	11
総数	0	7	0	2	1	6	11	7	18	18	3	4	10	13	0	2	3	11	1	1	0	14	5	0	2	17	156

小文字の誤答カテゴリ別の件数

(単位：件数)

2023	a	b	c	d	e	f	g	h	i	j	k	l	m	n	o	p	q	r	s	t	u	v	w	x	y	z	総数
無答	0	3	0	8	3	10	11	11	5	8	1	9	8	12	0	10	14	14	2	2	1	5	8	0	6	2	153
鏡文字	2	0	0	0	1	0	0	0	0	19	0	0	0	0	0	0	0	0	1	0	1	0	0	0	0	0	24
大文字の縮小	0	2	0	8	6	6	11	5	2	6	0	22	9	8	0	0	22	5	0	4	11	0	0	0	12	1	140
発音と形の混同	1	0	0	0	2	1	1	0	0	0	0	2	2	1	0	0	0	1	0	0	1	1	0	0	0	1	14
形の不完全	0	0	0	0	0	1	0	0	3	2	2	0	0	0	0	1	0	0	0	0	0	0	2	0	0	0	11
類似形の鏡文字	0	11	0	6	0	0	0	0	0	1	0	0	1	0	0	3	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	22
類似形の誤答	3	1	0	2	0	4	0	2	1	0	0	1	0	2	0	0	3	0	0	0	0	0	0	0	0	0	19
その他	0	1	0	0	3	1	0	0	1	0	0	3	2	1	0	0	0	1	0	0	0	0	0	0	0	0	13
総数	6	18	0	24	15	23	23	18	12	36	3	37	22	24	0	14	39	21	3	6	14	6	10	0	18	4	396
2024	a	b	c	d	e	f	g	h	i	j	k	l	m	n	o	p	q	r	s	t	u	v	w	x	y	z	総数
無答	0	2	0	3	4	8	8	11	2	3	0	7	3	6	0	5	8	12	1	1	1	2	2	0	3	6	98
鏡文字	0	0	0	0	0	1	0	0	0	7	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	8
大文字の縮小	0	0	0	3	1	5	6	3	0	0	0	8	5	5	0	0	12	2	0	4	0	0	0	0	5	0	59
発音と形の混同	1	7	0	0	1	0	7	2	0	0	0	0	5	4	0	0	0	0	0	0	10	0	0	0	11	48	
形の不完全	0	2	0	2	0	1	0	0	4	20	11	3	0	0	0	6	3	0	0	2	6	0	1	0	2	0	63
類似形の鏡文字	0	6	0	4	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	7	2	0	0	0	0	0	0	0	0	0	19
類似形の誤答	0	1	0	3	0	1	1	0	1	0	0	0	0	0	0	1	2	0	0	1	0	0	1	0	1	0	13
その他	0	0	1	0	0	2	1	1	0	0	0	2	2	4	0	1	0	2	0	0	0	2	3	0	0	0	21
総数	1	18	1	15	6	18	23	17	7	30	11	20	15	19	0	20	27	16	1	8	7	14	7	0	11	17	329